（別紙１）

論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　消滅し生成する《わたし》たち
－グスタフ・マイリンクの『ゴーレム』と『西の窓の天使』－

氏　名　竹 腰 祐 子

本論考は、世紀転換期を生きたグスタフ・マイリンク（1868-1932)をめぐる「わたし」について分析し、マイリンク再評価を試みる。『ゴーレム』(1915)を除き、彼の作品に関する批評況は貧しいうえ、自伝的要素や神秘主義の側面を強調する、偏向した解釈が多い。流行幻想作家の像は根強い。作中の曖昧な『わたし』から、多重人格的に生成、消滅する「わたし」たちについて、『ゴーレム』と『西の窓の天使』(1927)を中心に論じる。

自己は演出すべき素材、自己像は作られるもの、との極めて現代的な自意識をもち、自己像と戯れるマイリンクは、得意の話術で虚実さだかならぬ話を作り上げた。語るように書く試みは処女作『熱い兵士』に結晶し、『ゴーレム』の初稿はパルログラフのロールに刻まれた。語りの包含する騙りの性質がマイリンク作品を特徴づけ、「わたし」から「わたし」たちが発生する素地を生んだ。

帽子を取り違えてアタナシウス・ペルナートになる、記憶喪失者にしてよそ者の『ゴーレム』の「わたし」は、ひとの噂や女たちの導きにより、衛生化まえのプラハのユダヤ人街で「わたし」を確立しようとする。その様子は、作中のゴーレムの姿に酷似する。『ゴーレム』に固定的な土塊ゴーレムはおらず、代わりに噂としてのゴーレムが、ユダヤ人街の人々の集合的無意識を反映しつつ、伝染病のように人々の脳に伝播する。

帽子をかぶる「わたし」の時空と脱いだ「わたし」がいる時空は、『ゴーレム』の入れ子構造をつくる。象徴群の重なり合いや分裂や増殖のちからをかりて、入れ子から入れ子への移行や入れ子のなかの時空の伸縮運動が展開する。幻想とも現実ともつかぬ体験をする「わたし」は、『ゴーレム』を手にする読み手の体験を象徴する。

『西の窓の天使』も枠構造をとり、「わたし」の「わたし」越えは、ディーとの一体化と両性の結合によって達成される。「わたし」は、書字の権勢のもと手記を読み解き、翻訳、編集を介し、エリザベス朝の碩学ジョン・ディーと重なり合う。グリーンは、母親の胎内に安らぐ状態に似た、男女を反転させた形での結合例を示し、ディーと女王はすれ違いに終わり、貞節なフロム夫人と誘惑の権化、侯爵婦人に欲望を分裂させる「わたし」は、最終的にはすべての女性性を備える、エリザベスの名の象徴と結ばれる。内面を反映する幻と説明される、ディーが追い求めた「西の窓の天使」は表題『西の窓の天使』にも採用され、「わたし」の「わたし」越えと、読み手の読むことをも幻を追う行為かもしれないと批評する。読む行為でつながれたディーと「わたし」と読み手の三者がそれぞれの「西の窓の天使」を追い求める三重の運動は、書物『西の窓の天使』のなかでひとつになる。はじめから同じ印字で現れている、手記と「わたし」の記録と新聞記事は、三枠の相互浸透を予告していたのだ。『西の窓の天使』は、タイトルと印字により、三者の運動と三つの入れ子をひとつにする。

「わたし」から「わたし」たちが生まれる物語の背景には、時代の揺らぎがある。技術革新は大量殺戮兵器を生み、固有なわたしを取り替え可能な集団のひとりに変えた。一方で声の録音装置を生産し、わたしのなかに潜在する無数のわたしたちの克明な記録を可能にした。緩やかに束ねられるわたしであった、かつての自己同一性は、個別の場面に現れる数知れぬわたしたちの集合体となったのだ。語る自分を妨げないパルログラフはマイリンクの「わたし」たちを記録するのに貢献したはずである。語りの自由連想に引き出され、彼の無意識から浮上した「わたし」たちは、作者マイリンクからフィクションのなかの「マイリンク」へ、そして「わたし」たちへとずれていく。彫琢の極められた結晶のイメージで捉えられる文学作品の概念から遠くにあるものが彼の作品の本質的性格をつくるのは、テクストの内と外とを意図的に突き崩そうとする「わたし」たちの運動があるからだ。フィクションのそとにいる書き手と読み手の「わたし」から「わたし」たちが引き出されていく運動は、テクストのなかでの「わたし」たちの生成消滅の運動と呼応している。語るマイリンクから騙りが覗く、パロールがとりもつ奔放さは、「わたし」から「わたし」たちが生まれる作品構造に影響し、文字に固定された物語にもその痕跡を残す。パロールから誕生したマイリンク作品は、エクリチュールに姿を変えたあともパロール性を発揮し続ける。話すことと書くことの過程で起こるわたしの広がりの感覚をたよりに、マイリンクは「わたし」が「わたし」を越えゆく物語を紡ぎ出したのだ。